

日本蜜蜂の飼育

山中 清

平成7年の春は順調に採蜜、増殖が行われたが、冬季に入ると予期せぬ寒波に見舞われ、思わぬ失敗が起こったことを近隣の飼育者より聞き及んだ。そこで筆者がこれまでに行っている日本蜜蜂の飼育法について紹介したい。

飼育箱の改良

杉丸太や板箱の巣箱を西洋式の巣箱に切り替えると、日々の管理が非常に楽に行うことができる。その巣箱を山間地に設置することもできる。巣箱は地面に直接置かず、30cmほど高くしておく。日本蜜蜂はスムシに巣板を害されても、巣外に追い出そうとしない。被害が広がると巣を見捨てて逃げ出してしまう欠点がある。

そのため、1週間に一度、底板の掃除を行うことで、次第にスムシは減少する。

西洋種式巣箱の作り方

一般に使われている西洋種式の8枚箱または10枚箱と同じ寸法である。底板の上に10枚群の箱では高さ10cm(図1左)、8枚群の箱では高さ15cm(図1右)の箱を作り、その上に巣箱を重ねた2段重ねとなっている。この2



図1 西洋種式10枚(左)と8枚巣箱(右)

段重ねにより巣箱およびスムシの掃除が非常に容易にできる。巣枠を1枚1枚ずらして巣箱の底を掃除する場合にはハチが驚いて片方に集合してしまう。そのため早春時の内検や掃除の際に、幼虫を冷やしてしまう欠点がある。2段重ね箱にした場合は、上段の巣箱を横に降ろすことで掃除ができる。

巣箱の内検は4月、5月の分割、採蜜時を除き2か月に1回程度であるため、ハチの動揺は非常に少ない。スムシの大部分は底板の巣層の中や底板と継箱の裏側に潜んでいる。ハイブツールで掻き取り、新聞紙に取り込み消却する。掃除の回数が増すとスムシの数も減少する。掃除は1週間に1回程度行うのがよいと思われる。

西洋種式巣箱に切り替える場合は、4月初旬～中旬頃が一番理想的である。分蜂の起こる前に針金を張った巣枠に旧巣箱から卵、幼虫のある巣板を取り出して張り付けて、針金で鉢巻状に2か所を止める。大きい巣板であれば2枚程度、小さければ巣枠一杯になるように張り付ける(図2)。横張りの針金に添わせて裏側よりカッターナイフで巣板に切り込みを入れると綺麗にできる。鉢巻状に止めた針金は1週間後に取り除く。ただし、巣枠に取り付けてある3本の横張りの針金は、巣板の落下の原因となるため切断しない。

分蜂群を西洋種式に切り替える場合は、4～5枚の巣礎を張った巣箱に払い入れ、一番外側に仕切板を挿入する。巣の盛り上げに注意する。野外に花がある場合は給餌は不要である。

採蜜時に西洋種式に切り替える場合は、卵や

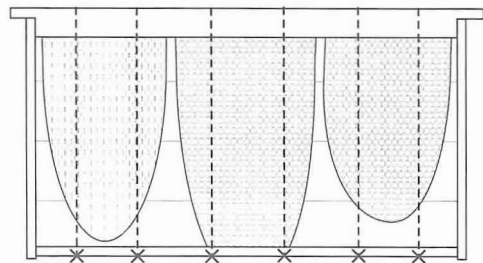


図2 自然巣板の巣枠への張り付け
(点線は針金を示す)

幼虫のある巣板を張り付けるのは上記と同じであるが、一番外側に給餌器を入れて給餌を行う。

給餌飼料の作り方

水 1ℓを沸騰させ、砂糖 1kg を溶かす、冷えてから夕方に給餌する。昼間に給餌すると盗蜂発生の原因となる。給餌器にはハチが溺れないように藁や水苔などを入れて浮かしておく。

人工分蜂

女王蜂の羽化までの日数は、卵 3 日、幼虫 5 日、蛹 7～8 日である。内検時に王台ができていたら、日数を逆算すれば女王誕生予定日が分かる。女王誕生予定日と記したシールなどを巣箱の横に張り付けておく。女王誕生の 2～3 日前には、王台下部に落花生の豆の薄皮と同じような色をした繭が現れる。その時点で、元巣箱より旧女王の付いている巣板を隣に設置した新巣箱に入れる。この際に女王の付いている巣板にも王台の有無を十分に確認する。万一王台があれば切り取る。さらに元巣箱より一番外側にある巣板と有蓋巣房巣板の合計 3 枚を新巣箱に移す。さらに巣礎枠に蜜を吹き付けて元の巣箱に挿入する。この枠に多数のハチが付着したら新巣箱の左右外側に導入する。計 5 枚で出発する。新巣箱の巣門は開けたままにしておく。外勤蜂は元巣箱に戻ってしまい、新巣箱は旧女王と若い働き蜂のみとなる。そのため新巣箱にはハチを多目に取り込んでおく。この様にして分割すれば分蜂も起こらない。蜂群を増やすのを望まない時は予備群として秋までおき、万一の場合は合同する。

新聞紙合同法

合同は季節を問わず新聞紙合同を行っている。3 日連続の内検で巣房に卵がない場合、隣の群に合同する。夕方、働き蜂が帰巢した頃に隣の有王群に 1 枚の新聞紙を二つ折りにして巣箱の上に置き、釘で巣板と巣板の間に小孔を 30 程開ける。その小孔に蜜を垂らし、孔を塞ぐようにする。新聞紙の上に無王群の継箱を乗せ



図 3 巣箱に付けたスズメバチ防除器

る。無王群の巣箱の巣門は閉じておく。3 日程すると下段の巣門から新聞紙の破れが吹き出してくると合同は成功である。

採蜜

巣板は 3～4 年は使用できる。蜜蓋を切り取ってから分離器で採蜜する。日本種蜜蜂は巣板に樹脂を混入していないため非常に壊れやすい。そのため分離器を強く回転するのは禁物である。

盛夏の管理

梅雨期に入ると蜜源も少なくなり、貯蜜も不足してくる。内検して蜜が少ない群には給餌をする。6 月、7 月は蜂群の発展期である。夏の強群が来期の成功につながってくる。また暑さも増す季節であるため日陰を作る。

スズメバチの防除

9 月上旬になったら巣箱にスズメバチ防除器を取り付ける。日本蜂はスズメバチの襲来に対しては西洋種のように巣門に出て交戦することはなく、巣内に隠れてしまう。そのため巣門を 7 mm 以内にするとスズメバチの進入は止められるが、防除器を取り付ければさらに安全である (図 3)。

貯蜜と産卵

10 月に入ると、ハチも日毎に減ってくるので産卵圏の拡大に努める。秋季は春季と異なり



図4 日本種蜜蜂の遠望

巢板の中央部にも貯蜜する。11月上旬までは産卵圏が少しでも多くなるように注意する。特に貯蜜が多い時は空巢板と交換する。少しずつ全体に貯蜜する時は、仕切板の外に巢板を出して蜜の入れ替えをさせる。貯蜜巢板が多い時は、巢箱より取り出して越冬前の飼料か、春先の刺激奨励蜜に使用する。たとえ2~3枚の貯蜜枠でも取り出した時点で二硫化炭素で消毒を行い、新聞紙などで包み、水分の吸収を防ぐ。

越冬飼料

10月下旬~11月上旬までに給餌を終了する。12月に入ってからの給餌は遅すぎる。遅く給餌を行うと、給餌の水分で巢内が湿りがちになり、不利である。

越冬蜂の集合

12月には巢板も4~5枚に縮めて、ハチを密集させる。スムシは冬季は繁殖しないため、下段の継箱は取り除き、1段の巢箱だけにする。巢門も3cm程に縮める。

巢箱の防寒

12月中旬に入ったら巢板を巢箱の中央に集め、左右に仕切板を挿入する。左右に開いた空間の一方に布切れを入れる。1週間後に同じ様にもう一方の空間に布切れを入れる。左右同時に布を入れると巢箱内の温度が上昇してハチが逃げ出すなどするため注意する。巢板の上に栈木を置き、南京袋で蓋をしてその上に新聞紙3

枚を2つ折にして巢箱の蓋をする。

巢箱内部の防寒が完了した数日後に外部の防寒を行う。巢箱の底、前後左右を厚さ1.5~2.0cmの発泡スチロールで覆う。発泡スチロールが入手できない場合は段ボール紙で代用できる。巢門は3cm程開けておく。巢箱の上には塩ビの波板を乗せ、ブロックで押さえて、越冬準備の完了である(図4)。越冬中は、余りの静けさに越冬群の巢箱をたたいたり、巢箱を開けて蜂球を崩すようなことを行わない。

早春の管理

1月の中旬頃の温暖な日を選び、貯蜜の有無と女王蜂の確認を目的とした内検をする。3月上旬になったら、さらに精密な内検を行う。女王蜂の確認、産卵・育児の進行、貯蜜量などである。貯蜜不足の時は給餌する。越冬群の崩壊の原因は、越冬中の失敗と言われるが、早春の蜜切れが原因の場合が多い。有蓋蜜が残っている場合は、蓋を削り取って奨励蜜とする。3月上旬には、巢箱の防寒を1週間程度かけながら、少しずつ取り除く。巢箱内の防寒用の布は二硫化炭素で消毒、乾燥して保存する。

3月上、中旬頃は巢箱内の巢門に面した方にハチが密集して産卵、出房が始まっている。この時期に、さらに刺激奨励蜜を与える。これは5~6月の採蜜時に活動する働き蜂数に差が表れる。

日本種蜜蜂の性質は至って温順で、刺針を用いるのは稀である。そのため面布、燻煙器は必要としない。巢内の環境が良好な場合は強群になるが、逆境になると労働力が激減する。働き蜂の寿命も西洋種に比べて短いようである。さらに環境が満たされない時は巣を捨てて逃亡する。スムシに対しても抵抗力は弱い。収蜜力も西洋種に比べて半分程度以下であり、生産的養蜂の価値は低い。

しかし愛すべき点も多くあり、農山村で現在も変わりなく飼育されているのが現状である。